

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

### \* 緯度観測 100年の記念品と冊子

今は、国立天文台の一部になっている旧緯度観測所が緯度観測を始めて、100年を迎えたのは1999年であった。1999年10月23日に100年の記念式典が挙行されている。その際配布されたものが写真1、2の文鎮である。筆者には配布されなかったが、国立天文台の庶務関係の重要な仕事をされていた山下芳子氏が持っていたものを収蔵させていただいた。



写真1 記念の文鎮



写真2 木村栄の業績「Z項」の入った数式の文鎮

緯度観測所の沿革について書く能力は持っていないが、アーカイブの仕事をして知ったことを少し書くと、緯度変化の観測が地球内部の構造や物理過程の解明の手がかりになることが分かり、1895年、ベルリンで開催された第11回万国測地学協会総会において、国

際緯度観測事業（International Latitude Service：ILS）を設立する事が決まり、「極運動の決定と解明」が目的とされた。この目的達成のため、国際観測網を同一緯度上に展開し、全ての観測所が同じ星を観測し、星の位置誤差に起因する誤差を取り除く観測方法が採用され、世界の同一緯度（北緯39度08分）の6箇所（水沢（日本）、カルロフォルテ（イタリア）、ゲザスバーグ（アメリカ）、ユカイア（アメリカ）、シンシナチ（アメリカ）、チャルジュイ（ウズベキスタン）の一つとして日本の水沢が選ばれた。

1898年には緯度観測の母体として測地学委員会が発足しているが、この初代委員長は初代東京天文台長であった寺尾寿である。1899年12月11日、最初の緯度観測は木村栄と中野徳芳によって行われた。

そして木村栄によるZ項発見が有名で、木村栄は第1回文化勲章を受章している。写真3は正装した天頂儀の前の木村栄である。

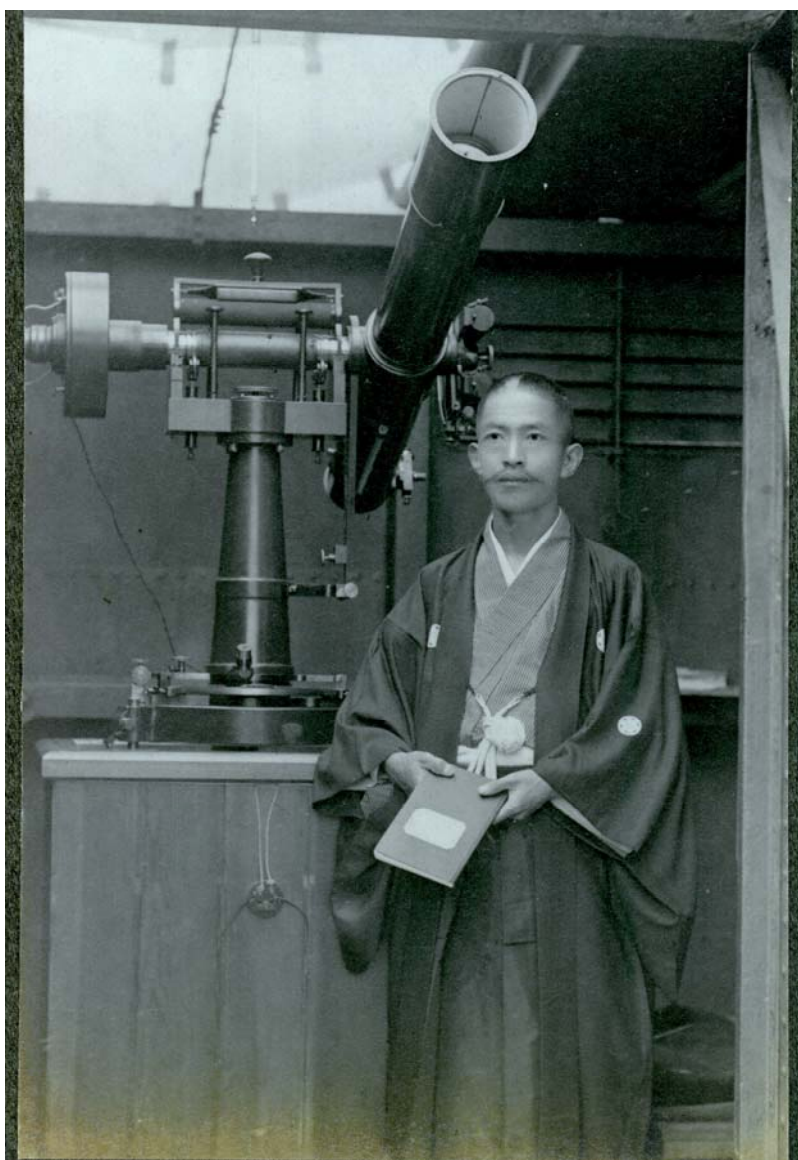


写真3 正装の木村栄

そして写真4は「緯度観測100年」の冊子である。

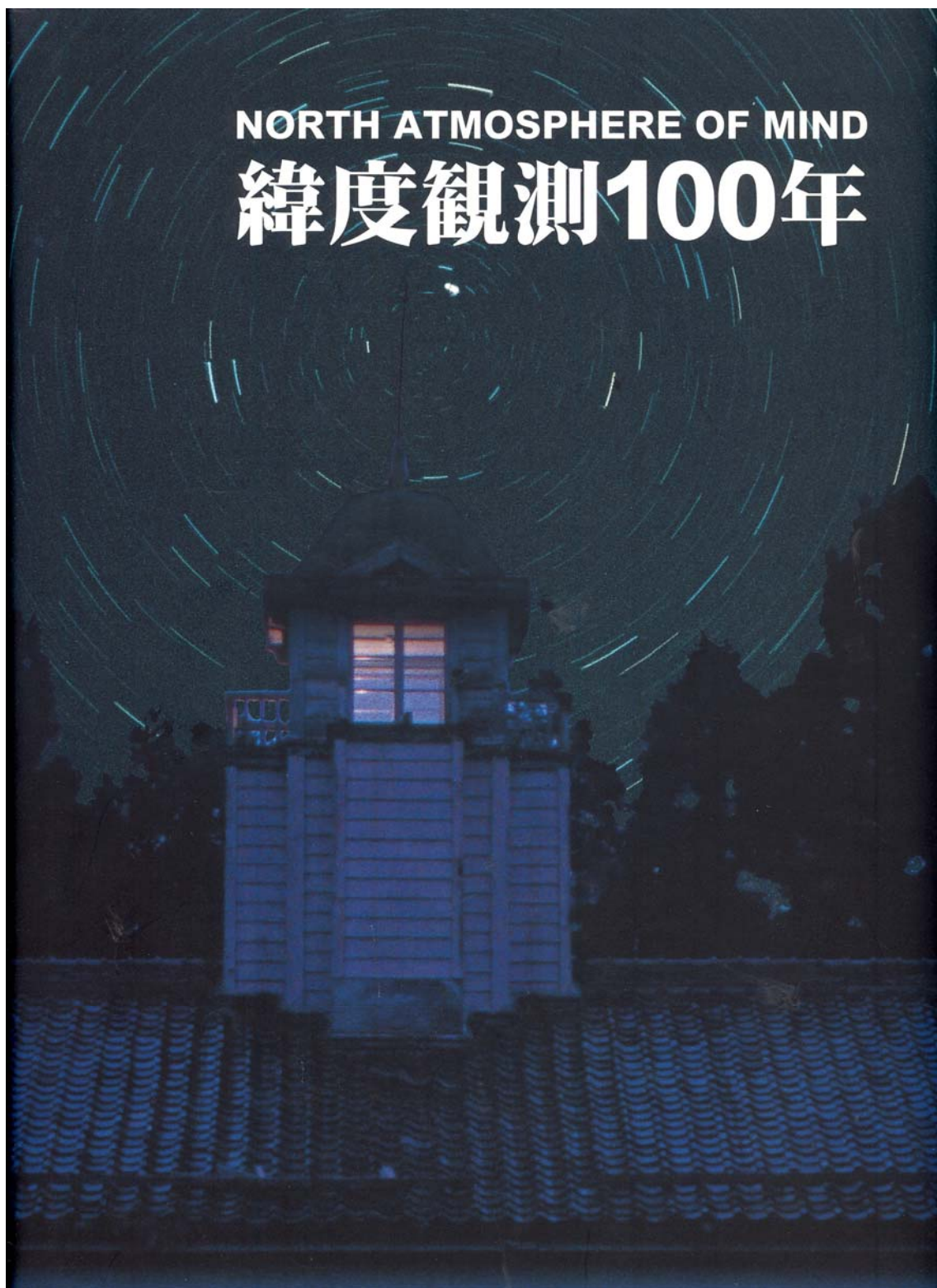


写真4 緯度観測100年の冊子